

日本の洋食器史 (3)

ノリタケと競った製陶所のモダンデザイン — 瀬栄陶器編 —

久保田厚子

1. はじめに

私が子供の時の食卓の日常食器の一つとして、図1.の小皿があり、裏にはSeyeiと記されていた。その後私は美術大学で陶芸を専攻したが、このSeyeiについては全く会う事は無かった。このさりげない小皿に魅力を感じ、素朴にSeyeiについて知りたいと思いながら現在に至った。漸くにして今、長い間暖めてきた疑問について本論文で答えたい。



図1. 瀬栄陶器小皿 昭和30年代後半

2. 研究の目的

Seyeiについてはほとんど手がかりが無く、途方に暮れるばかりだった。場所さえわからない中で、文献を入手して、次第に姿を表してきたSeyeiつまり瀬栄陶器は、一時は巨大な力を発揮した大メーカーであった。それが忽然と消えて、いったいいつから無くなったのかも不明であった。

廃業し忘れ去られたSeyei製品を研究対象として注目し、製品サンプルの収集を行ってきた。すると同時代の他の製陶所と製品の印象が異なっていた。それはデザインのバラツキである。およそどんなに一流の製陶所においても多少の失敗した製品はあるものである。しかしSeyeiつまり瀬栄陶器の製品には、あくまで私自身の印象であるが、上質な製品と俗悪とも感じられる製品が混在している。

瀬栄陶器の独特のデザイン性について、明らかにしてゆくことで現在の陶磁器業発展の一助としたい。

3. 瀬栄合資会社の開業

瀬栄合資会社は、明治29年(1896年)に、三代加藤左衛門はじめ愛知県瀬戸の有力な窯屋が資本金3万1千5百円を出資し、瀬戸で初めて出来た法人会社であった。販売機関として設立され、当初は、合資会社瀬栄組として、出資者三代加藤左衛門他の窯製品の性格から和物商として出発した。

加藤左衛門とは、瀬戸で江戸時代後期から明治にかけ

て三代続いた窯屋の屋号(ブランド名)である。

初代加藤左衛門は寛永年間に陶器製造を開始した。二代加藤左衛門は慶応3年(1867年)に磁器業に転じた。主に輸出向け製品を、多くの優秀な職人・絵師を擁して、製作困難な大花瓶や磁器の大燈籠などの大型製品を大々的に工場で生産した。

明治17年(1884年)に三代加藤左衛門が家業を継ぎ、明治32年に彼は大日本陶業百傑に選出された。現在の名古屋鉄道瀬戸線である瀬戸自動鉄道の創始者の一人であり、瀬戸市長も勤め、「瀬戸の天皇」と呼ばれた人物である。

瀬栄合資会社はこの三代加藤左衛門のほかに加藤繁太郎、加藤利作、加藤竹三郎などの有力者を出資者に持ち瀬戸の名門となっていた。

明治28年(1895年)8月、日清戦争が大勝利に終了して財界は好況を呈した。陶磁器輸出高は飛躍的に増大した。

明治29年(1896年)は合資会社瀬栄組以外に、恵那・土岐・可児の3郡では岐阜県陶磁器業組合、多治見町では多治見貿易株式会社が設立された年でもある。

日清戦争後は輸出意欲旺盛で、新技術の開発も活発であった。後に硬質陶器の先駆者となった松村八次郎によって、従来の栗皮灰釉から安価で安定した石灰釉へと転換した時期である。

同時期は名古屋に陶磁器問屋及び、加工業の開業が十数店に達し、その多くが昭和時代に活躍した中堅業者である。瀬栄合資会社もこのような時代を背景に開業した。

4. 瀬栄合資会社支配人加藤鎮三郎

明治33年(1900年)、瀬栄合資会社の支配人となった加藤鎮三郎は、「瀬戸の家康」といわれた人物であった。彼は和物陶磁器国内向け販売会社の瀬栄合資会社に、輸出部を開設した。

加藤鎮三郎は、瀬戸の窯屋の製品販売会社として窯屋の支配下にあった瀬栄合資会社を、瀬戸に限った業務から脱皮し飛躍させたいと望んでいた。そのためには瀬戸から名古屋に進出し、輸出陶磁器を本格的に扱う必要があった。

明治20年頃(1887年頃)までの我が国輸出陶磁器生産は、佐賀・有田が第一位であった。しかし、その後豊富な原料、生産者をかかえる瀬戸・美濃を背景に控えた名古屋が台頭して来る。

幕末より、有田の陶磁器製品を長崎から輸出してきた田代商店が、名古屋に進出したのを機に、森村組・瀧藤・西浦

円治・ワントイン商会などが次々に名古屋に進出した。

明治中期後半から輸出陶磁器において、美濃の製品が他の有力陶磁器産地を圧倒してくる。その原因は、安価なコストを可能にした製品分業制度であった。付近から産出する原土と美濃各地域の得意なアイテムを組み合わせ、職工の技術を細分化することによって、未熟練労働力を活用した。この専門生産体制の確立は安い価格を実現した。しかしこのことにより美濃の窯屋は商業資本に隷属して行った。つまり分業体制は、能率的低コストを実現したが、窯屋は一環的商品完成ができず、低賃金を余儀なくされ、商人による支配体制の元に置かれた。

一方瀬戸は、地理的に名古屋に近く、接触した商人も上位級であったため、自立した窯屋が出現した。明治30年の調査では、従業員数60人の加藤左衛門工場を筆頭に、40名以上の川本榊吉工場ほか有力な工場が多かった。彼らは自らの販売組織を作り、全国各地や輸出向けの売り込みを行った。その代表例が瀬栄合資会社である。

瀬戸にあっても、名古屋の森村組や田代商店などが、瀬戸の窯屋を自社の手窯として支配下に置き、瀬戸に大きく進出して力を持っていた。

5. 水野保一と瀬栄合資会社

水野保一は後に瀬栄合資会社の社長として同社を成長させ、その絶頂期の昭和38年に胃がんのため他界する。

瀬栄合資会社そのものであったと言っても過言ではない彼について以下にまとめて述べたい。

1) 水野保一の出自

水野保一は、明治19年(1886年)、岐阜県土岐郡妻木村に、穀物商の水野喜代助と同村の窯屋業熊谷家の娘ますとの長男として生まれた。水野家は明治以前は300年続いた同村の庄屋であったが、明治維新後は穀物商になっていた。さらに次第に生活に困窮し、明治26年(1893年)に土岐津高山に移り、小料理屋を開業した。当時から水野保一は、大変腕白な少年として有名であった。

2) 松川常五郎商店時代

水野保一はかつて高等科の修学旅行で一度だけ行った名古屋にあこがれを強く持っていた。明治33年(1900年)、中央線の名古屋―多治見間開通をきっかけに、15歳の彼は両親の反対を押し切って、名古屋の陶磁器仲買商、松川常五郎商店へ奉公する。

前述のとおり、明治30年代は、日清戦争の勝利から陶磁器輸出業が飛躍的に発展し、名古屋は陶磁器貿易の主流が集まり活気に満ちていた。

松川常五郎商店での厳しい修行時代を耐えて明治37年

(1904年)になると、水野保一は「やすさ」と呼ばれて実力を発揮し始めた。彼は膨大な輸出陶磁器について常に商品形状と原価をスケッチし、他社の見本の形状・デザインを記録していった。この姿は他社から恐れられてさえた。

水野保一は明治37年の日本陶器合名会社設立時から輸出陶磁器の仲買業として、日本陶器(現ノリタケ)の製品を扱った。その中で、それまでの瀬戸や美濃の灰白色の軟質磁器とは違う、日本陶器の純白硬質磁器に心を奪われた。

3) 独立

明治37年(1904年)に始まった日露戦争が勝利し、再び好景気を呈した。しかしこの活況は長くは続かず、明治40年(1907年)には株式市場が大暴落した。名古屋陶業界は深刻な打撃を受け、松川常五郎商店は負債を負ったまま同年閉店した。松川常五郎商店の閉店までに、水野保一は同店の番頭として、世話になってきた妻木村の親戚筋の窯屋に、多額の損失を負わせていた。

明治41年(1908年)の名古屋港の開港整備により、それまで大阪・神戸の華僑を通して輸出されていた東南アジア向け陶磁器輸出業が、名古屋に移転して来た。名古屋は以前の北米や欧州諸国向け陶磁器輸出に加え、全国的な覇権が確立していった。この年、水野保一は名古屋鍋屋町の箱屋の片隅を借りて、水野商店として独立した。

水野保一自身はいままで貯めたスケッチから石膏原型を起こして着色し、輸出陶磁器の見本を製作した。その見本を輸出商社にもちこんで注文を受け、窯屋に焼成させた後、絵付け屋で完成させた。輸出商社に納品し即金で決済してもらい、窯屋と絵付け屋に支払って信用を築いていった。明治42年(1909年)には、長堀町に店を構えるまでになった。

4) 瀬栄合資会社との出会い

水野保一と瀬戸の瀬栄合資会社の出会いは、水野保一が貿易商社から注文を受けた染付12客ティーセットを、瀬栄合資会社に製造依頼したことが始まりである。瀬栄合資会社は瀬戸製品の販売にとどまらず、専属の窯屋を持って生産も行っていたからである。

瀬栄合資会社の番頭、斉藤徳次郎は、水野保一の豊富な商品知識、商品価値と原価に対する大胆な商才を感じ、支配人加藤鎮三郎に報告した。加藤鎮三郎は水野保一の能力を見込み、自身の名古屋進出の夢を実現するべく、長女はると水野保一を結婚させた。

5) ドイツ磁器の模倣

第一次世界大戦後の大正4年(1915年)から、水野商店は大量のままご用ティーセットの注文を欧米向けにこなしてゆく。日本の他社製品より水野商店が注文を独占できたのは、

ドイツ磁器の正確な模倣デザインにあった。第一次世界大戦によってドイツ磁器はあらゆる市場から締め出されたが、欧米市場での需要は旺盛で、入手困難なドイツ磁器まがいで安価な水野商店の商品に、大量の注文が殺到した。

第一次世界大戦後の好景気のなか、水野商店は優秀な原型師を自社に持ってドイツ製品を複製し、自社素地工場と絵付け工場を設立して製造を行った。

6) 瀬栄合資会社と水野商店の合併

大正7年(1918年)、瀬栄合資会社において、支配人加藤鎮三郎により国内向け販売から海外輸出へ主たる業務を転換することが承認された。そのために加藤鎮三郎の娘婿にあたる水野保一の水野商店との合併が行われた。大正8年(1919年)、加藤鎮三郎と水野保一を代表社員として新たな瀬栄合資会社が発足した。

6. 大正から昭和前期(第二次世界対戦以前)

合併した瀬栄合資会社は、以前からの内地販売に加えて、旧水野商店の北米・欧州向け輸出が主となっていた。しかし大正9年(1920年)には、第一次世界大戦の反動により今までの好景気が終わり、デフレを伴った景気の後退に突入した。

大正13年(1924年)に名古屋陶磁器貿易商工同業組合組長の松村八次郎の自社業績不振による辞職を受け、39歳の水野保一が第一部長に選出された。同年、他社に先駆けて、水野保一によって瀬栄合資会社の東芳野町の絵付け工場に、最新のドイツ製電気窯16基が設置された。これにより、夜間の余剰電力を格安に利用できるようになった。旧水野商店時代には500坪足らずの東芳野町の絵付け工場は、合併後には2200坪になり、従業員は250名を数えた。

大正14年(1925年)には景気が上昇期になり、瀬栄合資会社は常滑や四日市の万古焼の輸出を手がけ始めた。

7. SGK 商会の設立

実家の食器棚に図2.のカラードチャイナのリムに銀彩渦線の大さめのプレートが2枚あって、裏印がSGKだった。すっきりとシンプルでモダンなデザインである。その後買い求めた図5.の古いカップ&ソーサーにもSGKマークがあった。SGKの裏印については、SeyeiやのSC(三郷陶器)のマーク同様、いかなるメーカーなのかなかなか判らなかった。

図4.の国内向けディナーセットを購入した。裏印にはSEYEI CHINAとあった。よく見るとその中の図3.のディナー皿と図2.のSGKのディナーは上絵センターパターンが有るか無いかだけで、全く同一製品である。

このことからSGKとSEYEIの関係に注目した。文献によって、SGKは瀬栄合資会社の略称であり、オランダ領東インド(イ

ンドネシア)の現地法人であるSGK商会であることがわかってきた。しかし裏印についての資料は全く見当たらなかった。今年夏、名古屋市にある財団法人日本陶磁器意匠センターに、瀬栄合資会社やSGKの裏印の登録が残っていないか問い合わせを試みた。その結果、SEYEIの裏印について多くの情報を同センター櫻井氏から、提供を受けることが出来た。図6.は昭和7~8年、図7.は昭和10年頃、図8.は昭和29年頃に、名古屋陶磁器工業組合に登録された瀬栄合資



図2. SGK商会 ディナー皿



図3. SEYEI CHINA ディナー皿 昭和34年頃



図4. SEYEI CHINA ディナーセット 昭和34年頃



図5. SGK商会 カップ&ソーサー



図6. 昭和7~8年頃の瀬栄合資会社裏印

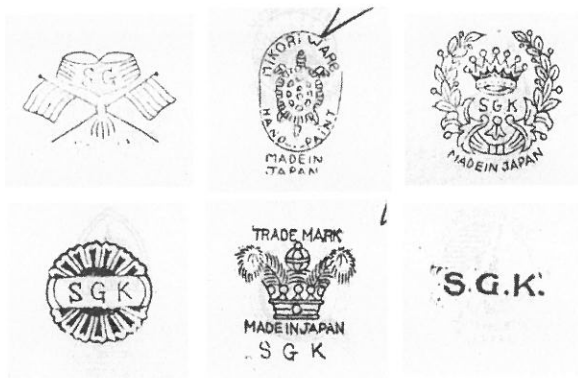


図7. 昭和10年頃の瀬栄合資会社裏印

会社の主な商標である。同センターにはこの3つの時期の裏印だけが残されていた。

図3と図4のディナーセットの裏印は、昭和29年の登録番号420と登録番号427に大変近く、おそらく昭和29年以降の製品とみて間違い無いであろう。しかし図2と図5のSGKの裏印については、昭和7年から10年頃の中には見当たらない。しかしこの資料の裏印は、瀬栄合資会社に使用されて来た裏印の一部である。製品デザインや品質からこの頃の輸出用の可能性が考えられる。戦後もSGKの裏印

で輸出をしているため、戦前のものか戦後のものか判らない。

明治から大正時代において、日本の陶磁器輸出先は北米を主とし、第二はインドと蘭領東インド（インドネシア）であった。しかし、後者は中国人バイヤーが間に入るために大変不安定でリスクも伴っていた。

昭和3年、水野保一は船舶運航会社と提携し、格安な運賃を確立した上に、インドネシア、ジャワ島に現地法人としてSGK商會を設立した。当時蘭領東インド（インドネシア）には日本陶器、東洋陶器（TTC）の森村系現地法人である、日東洋行他多くの商社が競っていた。瀬栄本社はSGK商會に力を注ぎ、現地に支店や代理店を開設していった。昭和6年（1931年）頃、SGK商會は蘭領東インドにおいて大きくシェアを持つに至っている。日本の輸出洋食器は北米向け高級品に対して、アジア向け製品は普通品であった。そのことがこのSGKの2点からも伺い知れる。



図8. 昭和29年頃の瀬栄合資会社裏印

8. 守山工場設立

昭和4年（1929年）、瀬栄合資会社は名古屋市の郊外守山に本格的な製陶工場を建設した。もともと問屋業からスタートした瀬栄合資会社にとって自社工場での製造は困難を伴う冒険であった。守山工場は半磁器製造工場である。

半磁器とは、もともと国産硬質陶器の開発途中に副産物として得られたものである。硬質陶器の開発は名古屋の松村八次郎、金沢の林田組、農商務省鉱業試験所の3者で同時期に研究がなされた。我が国で初めて硬質陶器の事業化を行ったのは前出の松村八次郎と言われている。彼は東京

*日本の洋食器史（3） ノリタケと競った製陶所のモダンデザイン —瀬栄陶器編— 久保田厚子

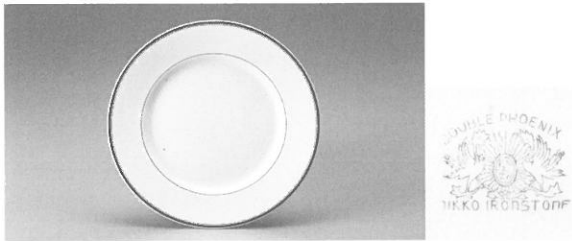


図9. 日本硬質陶器製青筋ディナー皿 大正14年（1925年）頃～

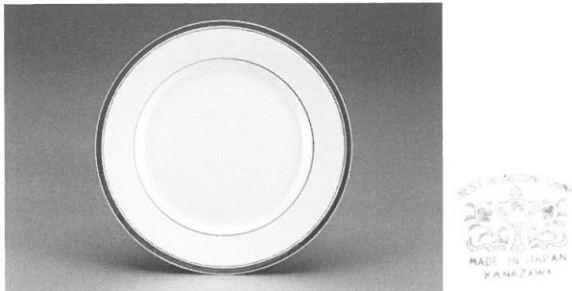


図10. 加賀製陶製青筋ディナー皿 大正14年（1925年）頃 硬質陶器

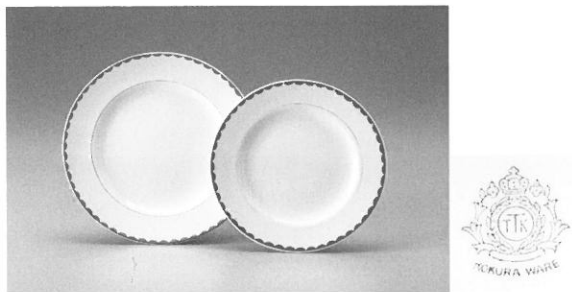


図11. 東洋陶器 ディナー皿、ミート皿 硬質陶器製 昭和4年（1929年）以降 東南アジア向け製品

工業学校（現東京工業大学）を卒業後、硬質陶器の研究を行ない、明治35年（1902年）名古屋に松村硬質陶器合名会社を設立した。

松村八次郎が苦心の末に開発した硬質陶器とは、西欧の日常食卓用器や衛生陶器に欠くことのできないもので、長石質陶器のことである。珪酸質に富んだ素地に粘土と長石を加えて可塑性と溶融性を高め、やや高い火度で締め焼きし、その後総釉で低火度の釉焼を行う。形状が正しく安価である。

しかし経時変化と呼ばれるあと入りの貫入と、価格の安さが長く製造業者を苦しめた。

大正元年（1912年）三重県四日市にて、水谷寅次郎が硬質陶器製造を目指し、松村八次郎の指導を受けながら研究した。この時硬質陶器開発は失敗したが、副産物として半磁器が得られた。その後半磁器は、昭和2年（1927年）に、山本増次郎（山庄製陶所）によって、四日市の硬質陶器が完成するまでの16年間、当地の主力輸出品であった。

瀬栄合資会社の守山工場は半磁器の大物キッチンウェア製造を目指した。図6.の瀬栄合資会社裏印のMORIYAMAは守山工場製のことであり、この守山工場で陶彫家月谷初子が原型師として働くことになる。

図9.は、硬質陶器開発から生産のために明治39年（1906年）設立した合名会社林田組を母体として、明治41年（1908年）設立の日本硬質陶器の初期製品である。日本硬質陶器は現在のニッコーである。

図10.は石川県の加賀製陶の製品と思われる。後の井出製陶の前身であるが、井出製陶は現在はノリタケに吸収合併され、ノリタケ井出になっている。

図11.のTTCの裏印の製品は東洋陶器の製品である。裏印から、昭和4年（1929年）以降に、東南アジア、南アメリカ、オーストラリアなど世界各国に輸出された硬質陶器製食器である。当時瀬栄合資会社が東南アジアで販路を競った日東洋行の製品である。

名古屋の松村硬質陶器と東洋陶器・日本硬質陶器・加賀製陶の4社で、大正14年（1914年）には、輸出硬質陶器同業組合を結成していた。

瀬栄合資会社は東南アジアでの事業展開に、他社の安価で軽く丈夫な硬質陶器食器に対する製品が必要であった。そのために半磁器工場を守山に建設したのであろう。

9. 瀬栄合資会社と月谷初子

1) 月谷初子の出生

月谷初子は明治2年（1868年）、2万3千石の大名であった内藤家の江戸屋敷で、内藤家当主の庶子として、月谷某女を母に出生した。庶子とはいえ当主の姫であった。しかし大政奉還直後の混乱から、内藤家の家臣、乾与兵衛の長女として高額の養育費をもって養子となった。

2) 彫刻家・月谷初子

月谷初子は乾家で何ん自由無く育てられた。12歳から、15歳まで、明治政府によってイタリアから招かれた彫刻家ラグーサの弟子、小倉惣次郎に彫刻を学んだ。さらに明治15年には、ラグーサ本人からも指導を受けた。月谷初子はラグーサの彫刻モデルになるほどの美貌であった。

若くして月谷初子の彫刻作品は内国勲業博覧会や明治29年（1896年）の彫工会展で銅牌を受賞するなどの高い評価を受けた。しかし彫刻に打ち込むために養家の縁談を振り切って乾家から絶縁された。その後、生糸貿易商人がバロンとなって彫刻制作を続けて行った。

明治30年（1897年）美術協会展銀牌受賞、農商務省買い上げになった。明治32年（1899年）春、月谷初子30歳の時、美術協会展で銅牌を受賞し、皇太子（大正天皇）御用品として買い上げられ、さらに同年の彫工会展出品作品は皇后陛下御用品として買い上げられた。

3) 陶彫家・月谷初子

明治32年（1899年）11月、彫刻家として絶頂期の月谷

初子は、10歳年下の北川青也と共に、パトロン元からすべてを捨てて出奔した。二人は横浜の宮川香山（真葛香山）のもとに身を寄せ、その後の3年間、月谷初子は陶彫を、夫の青也は陶芸を宮川香山の元で学んだ。

4) 宮川香山について

京都府粟田口で10代真葛長造の4男として江戸末期の1860年に生まれた。明治4年（1871年）から横浜に移り、輸出用陶磁器を様々な技法で製作した。特に、精密な彫刻を貼り付けた浮き彫りが有名である。（図12.）高い評価を受けて明治29年（1896年）に、陶芸では清風与平について二人目の帝室技芸員に選出された。西の清風与平、東の宮川香山と呼ばれた。

5) 内田十喜治との出会い

月谷初子と北川青也の二人は、パトロンに追われ宮川香山の工房を辞してから16年間、常滑、瀬戸、伊賀、信楽、備前など全国の窯場を点々と渡って仕事をした。

大正4年（1915年）篤志家熊沢一衛により、愛知県御器所村に工房の提供をうけて独立した。しかし自宅と作業場のみで焼成炉を持たなかった。

内田十喜治は明治14年（1881年）に生まれ、京都大学卒業の工学博士である。当時35歳で御器所村荒畑にて、珧瑯釉、ガラス、メッキ製造工場の内田研工所を経営していた。彼は後に大阪工業試験所であらゆる工業製品の発展に寄与した人物である。

月谷初子は内田十喜治に陶製人形の焼成を懇願した。内田十喜治の厚意により、珧瑯焼成用電気炉で陶器の焼成が可能となった。月谷初子は、大正7年（1918年）には内田研工所内に緑陶房を経営し、一時は盛況を呈するまでになった。

内田十喜治の孫の内田雅氏は筆者の古くからの友人であり、京都在住の著名な陶芸家である。彼のもとには今も月谷初子の作品とたくさんの石膏型が残っている。

6) 瀬栄陶器守山工場と月谷初子

大正8年末に月谷初子は御器所村の工房に自前の窯を持つに至った。しかし第一次世界大戦後の好景気で肥大化した不良債権の表面化と、大正12年（1923年）の関東大震災からの不況で、月谷初子は昭和4年（1929年）にはすべてを失った。瀬栄陶器守山工場でノベルティーの原型師になっていた弟子の紹介により、同年から瀬栄陶器に原型師として採用された。そのとき月谷初子の採用を瀬栄陶器支配人として決めたのは、20年前に瀬栄合資会社の番頭として、水野保一を最初に見初めた斉藤徳次郎であった。

月谷初子は瀬栄陶器守山工場に社宅を与えられ、ノベルティーの原型を給金を貰って製作する事となった。1年後には



図12.
宮川香山
浮彫蓮子白鷺翡翠図花瓶、明治前期、岐阜県現代陶芸美術館蔵



図13.
月谷初子
瀬栄陶器ノベルティー
昭和20年から昭和23年
OCCUPIED JAPAN
守山工場製品 半磁器
(財)名古屋陶磁器開館蔵

支配人齊藤徳次郎の計らいで社長水野保一に会い、守山工場の一隅に月谷初子自身の窯と作業場を、資金を会社から借りて建てる許可をうけた。その窯は忍窯と命名された。

水野保一は社員が陶芸作家として自社工場内で製作販売することを許すばかりでなく、沢山の好事家を紹介し、月谷初子の忍窯作品が高値で販売できるまでの手配を行った。

しかしその後、月谷初子はノベルティーの仕事を嫌い、瀬栄陶器守山工場での勤務を放棄してしまう。それでも忍窯で作陶を続ける事を水野保一は許していた。

彼女の仕事として現在残っている作品に、名古屋市の徳川美術館旧館屋根の織部の鯨がある。昭和10年(1935年)に徳川美術館開館のために、館長の徳川義親に依頼された。

名古屋城実測調査のデータをもとに月谷初子が鯨の原型をテラコッタで製作した。その原型から美術瓦の名工の手によって織部釉で焼成されたものが、今日の旧館の鯨である。

その後、夫北川青也が昭和14年(1939年)に亡くなり、陶彫作品の売れ行き不振から、瀬栄合資会社守山工場内の工房を失った。知人の世話になりながら食い詰める度に、2度にわたって瀬栄合資会社守山工場です仕事を貰っている。月谷初子は昭和20年(1945年)77歳で孤独に亡くなった。

図13.の半磁器製日本人形は、名古屋陶磁器会館の瀬栄製ノベルティー陳列棚にあったものである。裏印は図6.と図8.にあるMORIYAMAの花かごの印に、OCCUPIED JAPANを書き加えている。この事から昭和20年(1945年)から昭和23年(1948年)の4年間の製品である。

7) 瀬栄合資会社原型師 林幹生

林幹生は、現在は日展に所属する彫刻家であり、第36回日展出品「祈り」は総理大臣官邸に収蔵されている。

彼は昭和6年(1931年)に生まれ、昭和20年(1945年)4月、16歳で瀬栄合資会社に入社した。同年8月に終戦を迎え、それまでの陶器製手榴弾製造から、ヨーロッパ製品をサンプルとして写し、輸出用磁器ノベルティーの原型を製作した。彼は瀬栄合資会社の廃業まで同社に勤務した。

図13.の名古屋陶磁器会館にある半磁器製の瀬栄ノベルティーを実際に見てもらった。その結果、林幹生自身はこの製品を手がけてはいなかった。しかし彼が入社後水野保一社長から、守山工場地下室の膨大な量の月谷初子の石膏型からの試作を命じられたことがあった。それはいわゆる布袋像や寒山のような時代性の古いタイプであった。このときの試作は製品として販売された記憶は彼には無いが、他にも原型師が2名存在した。裏印からも、図13.は他の原型師によって型起こしされた一つと考えて良いだろう。

10. 第二次世界大戦

瀬栄合資会社は、昭和9年(1934年)、瀬戸市菱野の

高嶺製陶所を買収し、白素地ディナー・セットの研究を開始した。

昭和12年(1937年)は、陶磁器輸出は活況のさなかであった。日本陶器は則武工場、名古屋製陶所は最新の鳴海工場に一貫生産体制を確立していた。大きな貿易需要にディナー・セットで答えるべく、同年瀬栄合資会社は、22000坪の北米向けディナー・セット製造の南郊工場の建設に着手し、昭和14年(1939年)に完成した。

しかし第二次世界大戦が刻々と迫る中、完成直後の瀬栄合資会社南郊工場は、三菱重工業名古屋航空機製作所に軍需工場として貸与された。

瀬栄合資会社の守山工場他では陶器で缶詰を代用する防衛食器や、手榴弾を製造した。昭和20年(1945年)8月の終戦まで続き、林幹雄も入社後の5ヶ月間これを行った。

昭和20年(1945年)5月、瀬栄合資会社名古屋本社の東芳野町工場と南郊工場、四日市工場が空襲により全焼した。

11. 昭和20年(1945年)～昭和33年(1958年)

昭和20年(1945年)に終戦を迎えた我が国の陶磁器業界については筆者の日本の洋食器史(1)に詳述したので、本論では割愛する。

瀬栄合資会社は素地製造の守山と菱野工場の二つが戦災からまぬがれた。昭和20年(1945年)から昭和23年(1948年)の占領下では、米国占領軍設営関係陶磁器のうち、キッチンウェアを多量に受注して再建の足がかりとした。その後インドネシアのSGK商会社員などの帰国によって瀬栄合資会社の輸出事業は順調に発展していった。

昭和24年(1949年)に水野保一社長の努力によって、千種兵器廠東北角の国有地11200坪の払い下げを受け、瀬栄合資会社本社工場を建設し、加工完成業の中心工場となった。昭和26年(1951年)1月には、瀬戸の瀬栄菱野工場に国内初の重油焼成トンネル工場を築窯したが、製品の歩どまりが悪かった。続く昭和27年(1952年)からは、国内販売を再開し、東京に瀬栄合資会社の新店舗を開設した。

12. 季刊誌「食器」にみるセーエー陶器

季刊誌「食器」は昭和33年(1958年)9月5日に名古屋市総合通信社から創刊され、平成12年(2000年)に



図13.「食器」昭和33年(1958年)創刊号表紙とSEYEI広告

廃刊した。41年間の170号までに、名古屋を中心とした我が国のテーブルウェアの動向が読み取れる。瀬栄合資会社の戦後製品の展開について正確に事実が判る現在においては唯一の資料である。

1) 昭和30年代

本論文のため筆者が収集したサンプルに戦前の可能性がある製品は図2と図5のSGK裏印の2点を除いて見つからなかった。それは戦前の瀬栄合資会社がSGK商会として輸出主体だったからである。

昭和30年(1955年)に瀬栄合資会社は四日市工場にトンネル窯を築窯した。この頃から国内向け陶磁器販売は飛躍的に発展した。図14は昭和34年(1959年)の季刊誌「食器」の特集記事「生活を豊かにするホームセット」に、参考として三郷陶器製品とともに掲載された写真である。図16の楕円皿と芥子入れは筆者のサンプルである。この製品を手にした時、意味不明なデザインと粗悪品のような品質にもかかわらず、懐かしい思いがした。

昭和25・26年頃にたち吉が戦後の頒布会を初めて行った。頒布会とは宣伝チラシから予約を集め、毎月少しづつ配達するシステムである。計画生産が可能になり、経費がかからない販売方法であった。戦後の物不足時代においては、日本国民が頒布会によって食器に親近感を持ち、家庭用食器が充実していった。その大成功を受けて他の陶磁器メーカーが一斉に参入していった。

昭和30年代は頒布会全盛期である。戦前からの転写紙貼りのパターンから、「吹きもの」と呼ばれるデザインが流行した。昭和30年代前半は、いい食器を買いそろえることが当時の現代的な生活に欠く事ができないとされた。和食器と東洋陶器製の硬質陶器以外はすべて磁器製であった。

戦前は上流階級だけが購入できた洋食器フルセットから、戦後の台所設備にあわせて和食器アイテムと洋食器アイテムを組みあわせ、揃いの柄で全体で当時のお金で2000円から5000円でセットを組んだ。半年から10ヶ月間毎月配達され、その都度支払う形式であった。

「食器」創刊号の瀬栄合資会社の広告に、図16、図17の武者小路実篤原画の食器揃いが展示されている。このシリーズは水野保一社長が武者小路実篤と懇意であったため、特別に原画を食器に転写し販売する許可が得られたものであった。水野保一社長の個人的な好みが強いため、武者小路実篤原画食器シリーズは、「食器」昭和33年(1958年)創刊号から昭和35年(1960年)冬号、昭和36年(1961年)秋号、昭和37年(1962年)秋号、昭和37年(1962年)冬号、昭和38年(1963年)冬号、昭和39年(1964年)冬号、昭和40年(1965年)冬号、昭和42年(1967年)秋号の合計9回に渡って繰り返し掲載されている。

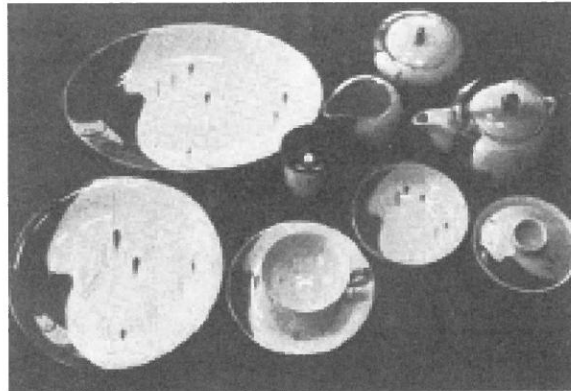


図14. 瀬栄合資会社ホームセット 3800円
昭和34年(1959年)季刊誌「食器」から

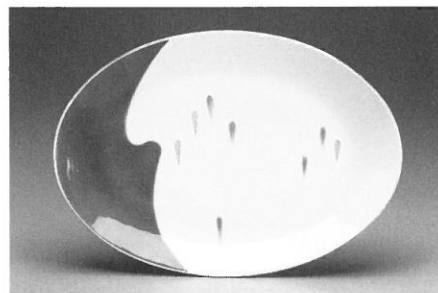


図15. 瀬栄合資会社ホームセット 昭和34年(1959年)



図16 昭和33年(1958年)頃



図17 昭和33年(1958年)頃

戦後の瀬栄合資会社の発展を達成した水野保一社長は昭和38年(1963年)に、がんのため他界し、空前の業界葬が行われた。水野保一社長が亡くなった後も4回武者小路実篤食器セットの広告が掲載された。同業他社の広告掲載製品と比較して大変異色で趣味的に見えるこの製品である。当時の頒布会はすべて同一の揃いの柄であった。従来日本人は個人持ちの湯のみや飯碗を決めて日常食器としていたことから、瀬栄合資会社が「食器」紙上で述べているのは、柄違いのホームセットとしての価値であった。この製品に瀬栄合資会社の一つの試みが読み取れる。



図18 日本陶器 わかば 昭和35~60年(1960~1985年)頃



図19 瀬栄陶器頒布会製品 昭和35年(1960年)頃



図20 瀬栄陶器頒布会製品 昭和37年(1962年)

図19、図20は典型的な吹き付け柄である。図19の製造年については、この年日本陶器が発表した図18「わかば」シリーズとデザインの共通性があり、影響が考えられる。瀬栄合資会社は開業以来外国製品サンプルを模倣し、海外の需要に応じて来た経緯から、戦後もライバル会社のデザインとほとんど同じ製品を発表する事が度々あった。

図21は季刊誌「食器」広告掲載の Flower Fairシリーズ

の一つである。このシリーズは誠に美しく独自のデザインの秀逸な製品である。図22の広告には武者小路実篤食器シリーズが並んで掲載されているが、瀬栄合資会社のデザイン室はモダンデザインと趣味的装飾の二つが混在している。



図21 Flower Fair 昭和37年(1962年)

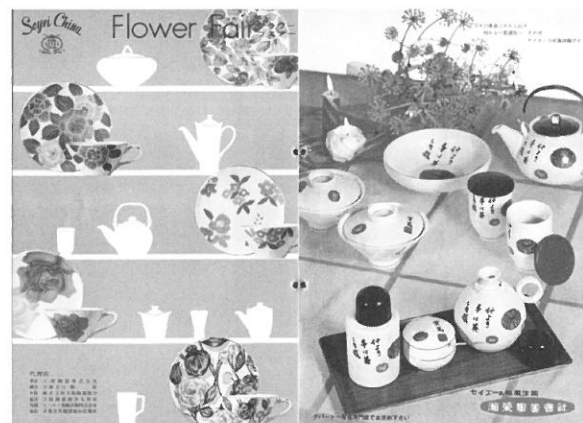


図22 「食器」広告 昭和37年(1962年)
Flower Fairと武者小路実篤シリーズ



図23 グレープ 昭和36年(1961年)

季刊誌「食器」掲載広告から、図23は昭和36年(1961年)に発売された瀬栄合資会社の和風洋陶の頒布会・オープンストック「グレープ」シリーズである。

昭和30年代の瀬栄合資会社頒布会製品と思える製品が図24、図25及び前出の図1、図3、図4である。

図1と図24は、年代確定資料が見つかった図19と同じ裏印である事と、デザインの時代性から推定した。

図25のバラ柄の頒布会シリーズの裏印は、瀬栄合資会社が長く使用したもので年代確定の参考にならない。同じ磁器素地を使った製品広告が図26の昭和37年(1962年)の「食

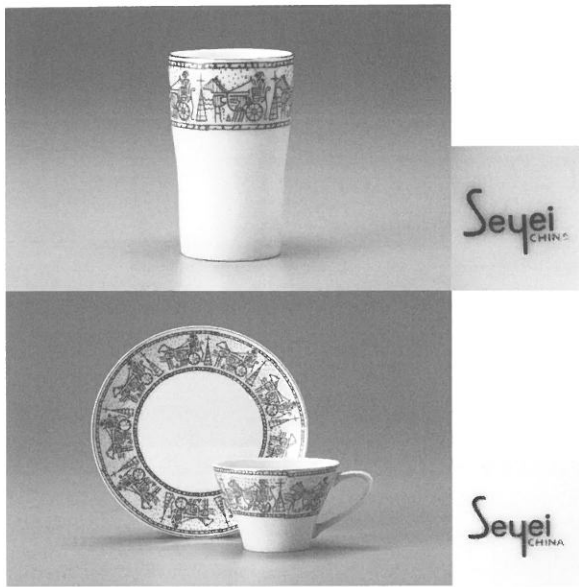


図24 瀬栄合資会社 昭和30年代

器」春号に掲載があるので30年代後半と推定できる。注目したいのがこのバラ柄ホームセットの中にあるプラスチック製蓋と茶托そしてガラス製品である。昭和30年代後半から始まったガラス食器の流行は、40年代はアートグラスや耐熱ガラスへ益々高まった。

昭和36年から37年（1961～1962年）に登場したメラミン食器は、新しい優れた可能性を持つ食器素材として評価された。今日我々がイメージする安っぽい感覚は当時においては無かった。今見ると安物のメラミン製蓋や盆も当時は現代的な感覚であった。またこの頃は、米国コーニング社製超耐熱ガラス・パイロセラムが庶民の高嶺の花であった。昭和37年（1962年）に鳴海製陶が国産耐熱ガラス・クックマスターを発売し、30年代後半からガラスの流行が始まった。

一つの頒布会に2万セットの注文が殺到した時代が過ぎ、参入した製陶所の数が増えすぎると、いかに安くて、さらに見栄えよく、最後まで続けて購入してもらおうかが、各社の苦心するところとなっていた。その苦心が図25バラ柄ホームセットに、メラミン製品やガラス製品との抱き合わせとして現れている。

2) 昭和40年代

昭和39年（1964年）の東京オリンピックによる建築ラッシュで、壁面にクラフトタイルがもてはやされた。食器デザインにも今までの機械生産的な磁器からクラフトデザインに人気が行き渡っていった。貿易自由化から沢山の外国製品が輸入され、国産品にも高級化の傾向が生まれてくる。

昭和43年（1968年）に瀬栄合資会社はセーエーアイボリーチャイナを発売した。この年にセーエーG4グループ展（瀬栄陶器クラフトデザイン室展）を行い、新しい室内装飾の提案を行った。クラフトデザイン室はデザイン顧問を日根野作三

と加藤達美、技術顧問を沢村滋郎とした。スタッフは古畑千三、三輪雅章、森正美、江崎勉、西川恒三、倉田和枝、安達章、松原紀夫、山本修、柴木正敏であった。

その他にセーエー・クラフトグループとして、京都の河島恒三、辻晋六、山田光、叶敏、木村盛和、清水卯一、熊倉順吉。美濃では5人の陶芸作家、常滑は2人、そして瀬戸の瀬栄陶器から古畑千三、三輪雅章、日根野作三、林幹雄、安達章、江崎勉をメンバーとして、昭和36年（1961年）に結成した。彼等は硬い質感の磁器以外のあらゆる陶芸品を制作した。

図28のラスコー洞窟壁画模写の花瓶を実際に見た時、異様な印象を受けた。製品製造技術は優れていて実際の制作方法が判らないほどである。この造形の評価に迷っていたとき、1960年代がアートグラス全盛期であった事に関連性を見い出した。つまりこの造形は60年代に一世風靡したガラス工芸の文脈にあるのである。

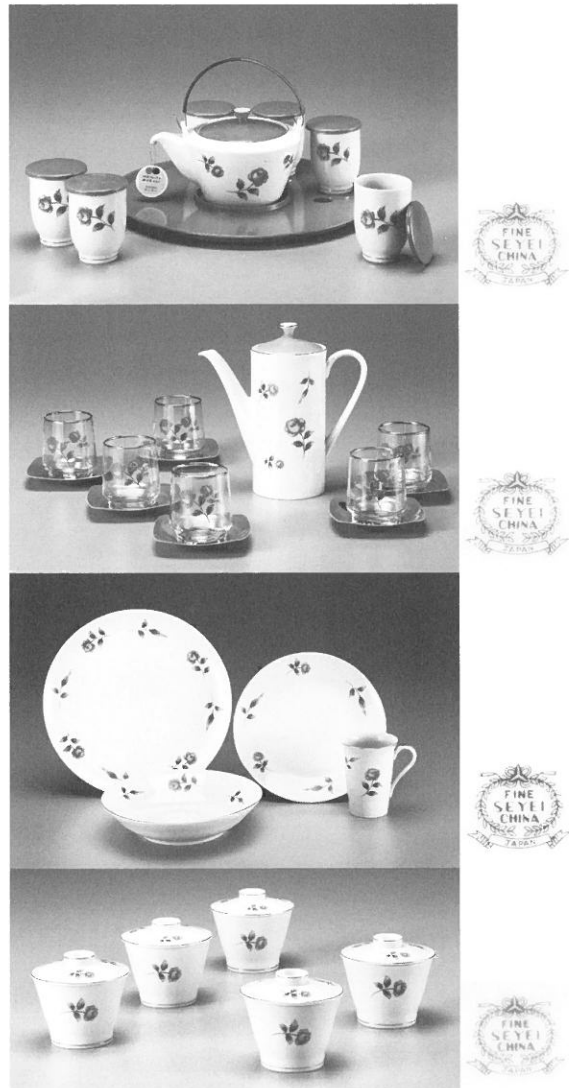


図25 瀬栄合資会社バラ柄ホームセット 昭和37年（1962年）頃



図26 「食器」広告 昭和37年（1962年）春号広告



図27 セーエーアイボリーチャイナ 昭和43年（1968年）



図28 瀬栄合資会社 ラスコー洞窟壁画模写品 昭和41年（1966年）



図29 アートグラス
食器35号
昭和42年（1967年）春号
広告抜粋

資料が無く正確な年代確定はできないが、おそらく昭和40年代と考えられる図30と図31、は昭和40年代のクラフトデザイン室やセーエークラフトグループによって従来の磁器デザイナーとは違う陶器質の製品と考えたい。

「食器」昭和43年（1968年）秋号の特集記事に「新婚2人のための食器」にこの頃の時代性を見る事ができる。

昭和30年代の頒布会は「もはや戦後ではない」と言われ、物不足の中からの旺盛な需要であった。昭和40年代のホームセットの需要を支えたのは、戦後の団塊の世代が適齢期を迎え、新しく家庭を持つための食器の購入であった。さらに結婚式の引き出物としての食器の人気から、年末年始の贈答品にまで食器セットの人気が高かった。



図30 瀬栄合資会社 硬質陶器または半磁器製品



図31 瀬栄合資会社 半磁器またはストーンウェア



図32 瀬栄合資会社 昭和40年代頃

3) 昭和50年代

「食器」昭和44年（1969年）春号に「毎朝新聞を振れば茶碗屋が落ちてくる」と題された記事がある。つまり多量の頒布会広告の新聞チラシを意味している。隆盛を極めた頒布会は昭和44年（1969年）上期を境に過当競争によって、旺盛な需要があるに関わらず破綻していった。

俗悪な磁器ホームセットから、流行は硬質陶器、そしてストーンウェアに変化し、ガラス食器が著しく台頭してくる。

昭和40年代後半から瀬栄合資会社はセーエーストーンとスノーボーンの新製品を発表してゆく。



図33 ジャンボカップ 昭和45年(1970年)

図33は「食器」昭和45年(1970年)春号の広告記事で紹介されている。そこには「セーエージャンボカップは紅茶なら4人前、カレーやサラダにも」とある。テーブルウェアとしては異形の製品である。図32の黒い草花のシルエットをデザインした製品と比べて格差が大きく感じられる。



図34 スノーボーン製 カップ&ソーサー 昭和53年(1978年)

図34は瀬栄合資会社最後の開発製品のスノーボーンである。形もパターンデザインもいかにもギフト用で魅力が乏しい。

13. 瀬栄合資会社の廃業

一般的に会社の創業は残された社史などから正確な事実が判る。ところが廃業について把握するのは困難である。瀬栄合資会社は季刊誌「食器」創刊号から一号も欠けることなく広告を掲載していた。それは昭和56年(1981年)夏号まで92号に渡って続いていた。翌秋号から製品の広告は無くなり、大阪セーエーと名古屋セーエーが見本市を開き、ミカサなど他社製品を販売した記事だけがあつた。このことから瀬栄合資会社の廃業を昭和56年(1981年)と考えたい。



図14.「食器」昭和56年(1981年)夏号表紙と瀬栄陶器最後の広告

14. 結語

瀬栄合資会社についてまるで重箱の隅をつつくような調査を行った。今まで何も判らなかつた事実が紡ぎだされて姿を見せて来た。しかし長い歴史を持ったこの製陶所のほんの一部を覗いたに過ぎないであろう。誰もライトを当てなかつた事も事実であり、忘れ去られた歴史を可能なかぎり整理してまとめた。

なぜ筆者がこの製陶所に尽きない興味をもったかは、郷愁かもしれない。確かに、ここに載せた製品や文献の世界がかつて存在した、筆者自身も共に生きてきた世界が広がっていた。昭和56年(1981年)に静かに操業を停止し、消えてしまったセーエーチャイナは、株式会社にもならず最後まで合資会社であった。ライバルの日本陶器や三郷陶器、協力関係の曽根磁叟園達と国産の西洋陶磁器の一時代を築いてきた。

始まりが加工完成業であり、外国製品をサンプルに常に売れる製品を追い求めてきた。自社独特のデザインの追求が貫徹しなかつたのかもしれない。

15. 参考文献

1. 「近代日本陶磁の華—シカゴ万国博覧会出品作品を中心に—」瀬戸市歴史民族資料館、1997
2. 「磁器の技と美、有田そして瀬戸へ」愛知県陶磁器資料館、瀬戸市歴史民族資料館、1998
3. 「東洋陶器70年史」東洋陶器株式会社、1887
4. 井出俊一「硬質陶器食器生産技術の歩み」セラミックスvol.31(7)1996
5. 加藤唐九郎「原色陶器大辞典」淡文社、1971
6. 「名古屋のやきもの—荒木定子コレクション—」荒木集成館、2004
7. 「名古屋陶業の百年」(財)名古屋陶磁器会館、1886
8. 小出種彦「茶わんや水保」水野保一伝記編集委員会、1964
9. 久保田厚子「日本の洋食器史(2)ノリタケと競った製陶所のモダンデザイン前編」岡山県立大学デザイン学部紀要vol.14no.1,2007
10. 小出種彦「永井精一郎伝」永井精一郎伝記編集委員会、1973
11. 日本輸出陶磁器史編集委員会「日本輸出陶磁器史」(財)名古屋陶磁器会館、1967
12. 三井弘三「概説 近代陶業史」日本陶業連盟、1978
13. 瀬栄陶器やきもの本編集室「やきもの本」瀬栄陶器会社、1966
14. 久保田厚子「日本の洋食器史(1)1966年-1996年」岡山県立大学デザイン学部紀要vol.16no.1,1999
15. 葵航太郎・木村一彦「オールド大倉・東陶・名陶」トンボ出版、2001
16. 桑原恭子「月の炎—女流陶芸の先駆—月谷初子」風媒社、2000
17. 「新世紀・名古屋城博—よみがえる金シャチ伝説—」新世紀・名古屋城博開催委員会、2005
18. 北陸中日新聞編集局「服部鉦業50年の歩み」服部鉦業株式会社、1981
19. 「開館記念展 I 現代陶芸の100年展」岐阜県現代陶芸美術館、2002
20. 「よみがえる金鯰伝説—新世紀・名古屋城博」新世紀・名古屋城博委員会、2005
21. 根来恵三「食器はふたたびデコラティブにもどる」食器34号、1966
22. 富田忠次郎他「毎朝、新聞を振れば茶碗屋が落ちてくる」食器43号、1969
23. 「特集生活を豊かにするホームセット」食器35号1959.
24. 「食器この10年」食器40号10周年号1968年
25. 「新婚2人のための食器」食器41号、1968
26. 「食器」創刊号(1958年170号から93号(1981年))

16. 写真引用

1. 図12. 宮川香山作浮彫蓮子白鷺翡翠図花瓶 岐阜県現代陶芸美術館
2. 図13月谷初子瀬栄陶器ノベルティー 名古屋陶磁器開館資料より
3. 図13「食器」昭和33年(1958年)創刊号表紙とSEYEI広告
4. 図14.「食器」昭和56年(1981年)夏号表紙と瀬栄陶器最後の広告
5. 図15「食器」昭和34年(1959年)瀬栄合資会社ホームセット
6. 図19日本陶器わかば「食器」昭和35年(1960年)より
7. 図28瀬栄合資会社 ラスコ—洞窟壁画模写品 瀬栄陶器やきもの本編集室「やきもの本」瀬栄陶器会社、1966
8. その他図版 中村光孝、スタジオ DaDa

*日本の洋食器史(3) ノリタケと競った製陶所のモダンデザイン—瀬栄陶器編— 久保田厚子



図4. 頒布会ホームセット 昭和34年頃



図1. 花柄小皿 昭和30年代後半



図15. 初期頒布会ホームセット 昭和34年(1959年)



図16 武者小路実篤食器セット 昭和33年(1958年)頃



図20 頒布会ホームセット 昭和37年（1962年）頃



図30 硬質陶器または半磁器サラダセット



図32 花柄プレート 昭和40年代頃



図19 頒布会 昭和35年（1960年）頃



図25 頒布会バラ柄ホームセット 昭和37年（1962年）頃



図27 セーエーアイボリーチャイナ 昭和43年（1968年）